

# 『キエフ洞窟(ペチェルスキイ)修道院聖者列伝』 解題と抄訳 ( )

三 浦 清 美

## “Kievan Caves Patericon” Translation and Commentary(I)

Kiyoharu Miura

### Abstract

“Kievan Caves Patericon”, a miscellany of legends, sermons and other religious works, is one of the masterpieces of medieval Russian literature in the so-called Kievan Period (from the middle of the 9th century till 1240). The core part of this miscellany, or legends written by Simon and Polikarp on the eve of the Mongolian attacks, seems to have been lost in the complete destruction of Rus by Mongolians and found in the 15<sup>th</sup> century, when the monasteries campaign in Rus was activated. This monument is composed of several groups of stories, concerning: 1. the foundation of the church, dedicated to the Dormition of the God’s Mother of the Kievan Caves Monastery; 2. the saint Feodosij Pecherskij; 3. Epistles and legends by Simon and Polikarp. This paper is a translation into Japanese of the first group of the Patericon and its commentary.

本稿は、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の全訳を志すもので、そのおよそ4分の1の部分(聖母就寝教会建立物語群)の翻訳ならび注である。全体は、3回ないしは4回の連載によって完結する予定である。今回は、解説として、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の構成と成立をめぐる諸事情を付記した。

### 解題

#### 1. キエフとキエフ洞窟修道院

##### 『キエフ洞窟修道院聖者列伝』

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』は、『原初年代記(過ぎし年月の物語)』、『イーゴリ遠征物語』などの作品とともに、キエフ時代(9世紀中ごろ - 1240)の代表的な文学作品である。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』は、キエフ洞窟修道院の靈威を顕揚する目的で、ここに暮らした修道士たちに関する説話を集めたものであるが、この作品集の成立事情やその文学的特質などはのちに詳述することとして、まずはこの作品集の背景にあるキエフという都市とキエフ洞窟修道院について簡単にまとめておくことにしよう。

森林地帯が草原に変わる端境の地域、いわゆる森林ステップ地帯に位置するキエフは、ロシア国家発祥の地で

あるが、この地は本来、南ロシアの草原地帯を跋扈する騎馬民族の活動領域だった。5世紀から9世紀にかけて、カスピ海北岸は、チュルク系と考えられるハザール帝国によって支配されていた。ちなみに、ペルシア語では、カスピ海は「ハザールの海」である。そのほか、南ロシア平原に覇を競った騎馬民族として、紀元前9世紀ころに繁栄したキンメリア人、アケメネス朝ペルシアを脅かしたスキタイ人、ローマ帝国に脅威を与えたアラン人、サルマート人などイラン系諸部族の名が挙がる。

『原初年代記』が伝えるところによると、のちにキエフとなる一帯には「森と大きな松林」があって、獣の狩猟を生業とするポリャーネ族<sup>\*1</sup>が住んでいたが、この部族からキー、シチェク、ホリフの3兄弟が出て、長兄キーの名にちなんでキエフ<sup>\*2</sup>を建てたと伝えている。

9世紀のなかごろ、ヴァイキングの活躍によってバルト海と黒海を結ぶ南北交易路が活性化すると、ルーシの北方面に居住する東スラヴ人たちが次第に力をつけて、ヴァイキングを追い払いその支配を脱する一方、ヴァイキングのルシ族(ロシアの古名ルーシはこのヴァイキングの部族名に由来する)の領袖リユーリクを担いで国家を建てた。『原初年代記』によれば、キエフはハザール帝国に朝貢していたが、リユーリクの部下であるアスコリドとジルがノヴゴロドから南下してキエフに入り、ハ

ザールにかわって統治を始めた(9世紀中ごろ)

このころからキエフは都市としての体裁を整え、名君ヤロスラフ賢公の治世が終わる11世紀中ごろにもっとも繁栄する。この時代、コンスタンティノープルからキリスト教を受け入れた(988年)ことはきわめて画期的な事件で、東スラヴ人はこれによってようやく文明世界の仲間入りを果たした。およそ1世紀早くキリスト教を受容していた南スラヴ諸国(ブルガリア、セルビア)から教会スラヴ語という文語が導入され、それが東スラヴ人の言語的環境に根づいて、11世紀半ばまでには独自の文学を産みだすまでになった。『キエフ・ペチェルスキ修道院聖者列伝』もそうして形成された東スラヴ人独自の文学的所産の一つである。

やがてスラヴ世界随一の宗教的中心に発展するキエフ洞窟修道院も、キエフという都市の消長とともにその歴史を刻んだといつてよい。988年、ウラジーミル聖公が国家ぐるみでキリスト教を受容すると、君主の主導によって教会や修道院がいくつも建立された。ヤロスラフ賢公が建立した聖ゲオルギ修道院、聖イレネ修道院などはそうした修道院の例であるが、しかしながら、キエフ洞窟修道院はこれら官製の修道院とは明らかに異なる。修道院の建立を主導したのは君主ではなく、厳しく自らを律しながら神の道を求める修道士たち自身だったからである。

キエフ洞窟修道院の黎明時代を物語る証言として、『原初年代記』1051年の項と『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の第7話が挙げられる。その両者が一致して指摘することは次のことである。キエフの町の喧騒を嫌った修道士たちが、鬱蒼とした森におおわれたドニエプル河岸の丘の斜面に小さな洞窟を掘り、神に祈りを捧げる場としたことがキエフ洞窟修道院の始まりだった。洞窟を神への祈りの場とするのは、ロシアにおいてもキエフに限られるものではなく、南ロシアのチェルニーゴフや北ロシアブスコフ近郊のペチョーラなどにも見られるが、淵源をたどってゆくと古代キリスト教会の東方修道制の伝統にゆきあたる。

キリスト教成立以前にも、クムラン教団に見られるように洞窟は祈りに専心する場であったが、キリスト教において洞窟は特別な意味づけがなされた。『ルカによる福音書』2章6・7節(マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた)から、カトリックではイエス・キリストは厩で生まれたとされるが、パレスティナ帯では暑さや寒さを避けるために岩山の洞窟を家畜小屋にしていたため、厩は実質的には洞窟でもあり、東方教会ではイエスが洞窟で誕生したと伝承する。

これらの状況があいまって、東方修道制の伝統においては、パレスティナでもエジプトでも洞窟は神への祈り

に専心する場所であった。この伝統の代表的な例は小アジア半島のカッパドキアに見出されるが、キエフ洞窟修道院もこの伝統の直系であると考えてよい。

『原初年代記』1051年の項と『キエフ洞窟修道院聖者列伝』第7話のあいだで一致を見ないのは、キエフ洞窟修道院の最初期、その起源に関する記述である。前者がやがて洞窟修道院ができる場所で最初に修行したのが、のちの府主教イラリオンであったとするのに対して、後者はあくまでキエフ洞窟修道院の開祖アントーニイであるとする。

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』第7話によれば、聖山アトスで修行を積んだアントーニイは、アトスの修道院長の勧めでキエフに戻ったが、在来のキエフのどの修道院も厳しい独住の修行を好むアントーニイの心になかなかつた。彼は森や野山を徘徊し、やがてベレスヴェトヴォ<sup>3</sup>と呼ばれた鬱蒼とした森のなかにかつてヴァリヤグ(ヴァイキング)の掘った洞窟を見つけ、祈りの場とする。ところが、アントーニイは、ウラジーミル聖公の死の直後に起こったボリスとグレーブ暗殺事件(1015年)に深い衝撃を受け、アトスに戻ってしまう。

アントーニイが去ったあとに、その洞窟を祈りの場としたのがイラリオンだったという。それ以降の経緯に関しては、両者の史料はほぼ一致する。ベレスヴェトヴォの聖使徒教会の司祭であったイラリオンが、静寂を求めてドニエプル河岸のその小さな洞窟に通い、勤行と祈りの場としたが、やがてイラリオンは府主教に叙任されたためその場所を去る。そこへ、アントーニイがふたたびアトスからキエフに戻って洞窟を祈りの場としたことは、両者の史料が記すとおりである。

やがてアントーニイの周りには、かれを慕う修道士たちが集まる。弟子たちの人数が増え、かれらは「大きな洞窟と教会と僧坊を掘った。」しかしながら、そこも手狭になったためこれら洞窟のうえに聖母就寝(ウスペンスキイ)<sup>4</sup>教会を建立した。その後も修道士たちの数は増えつづけたので、修道士たちはキエフ大公イジャスラフに請願して洞窟のうえにある山全体を譲り受けた。「修道院長と兄弟たちは大きな教会を定礎して修道院を掘り取り囲み、多くの僧坊を建て、教会が建て終わって聖像で飾った。こうしてこの時から洞窟修道院がはじまった」のである。

山を譲り受けて建設された「大きな教会」の建立の経緯は、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の聖母就寝教会建立物語群(第1-7話)に、それが神慮によるものであることを示す種々の奇跡譚とともに詳しく記されている。

キエフ洞窟修道院はこのように、世俗君主の影響力から独立して修道士たちが自発的に集合して作りあげた霊的共同体だったが、特筆すべきは、共同生活の細目を定めた修道規則(ウスタフ)をもち、その盛期においては

規律が厳しく保たれていたことである。

修道規則の導入の経緯については、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』第7話において伝えられている。修道規則は、コンスタンティノープルのストゥディオス修道院の修士ミカエルによって伝えられたもので、修道院の歌の歌い方、礼拝や教会における祈りの作法、食卓の座り方、教会における秩序など、修道院における行住坐臥の振る舞いを定めていた。14・15世紀のいわゆる荒野修道院創設運動において、修道規則に基づく規律ある共同生活は当たり前のこととして広まるが、キエフ洞窟修道院はそのさきがけとなった。修道規則を導入したのが「地上の天使、天上の人間」と讃えられた第3代修道院長フェオドーシイで、孤独の修業を愛した峻厳なアントーニイとは対照的ながら、ともにキエフ洞窟修道院の精神的支柱として長く語り継がれることになる。第8話から第13話、第36話はこのフェオドーシイ・ペチェルスキをめぐる物語群である。

キエフ洞窟修道院は、モンゴル侵寇までの時代、東スラヴ人の霊的、文化的中心地となった。11世紀から12世紀にかけて、ルーシ(ロシアの古名)の各都市の主教のうち、20人ほどがこの修道院の修士出身者であったことがわかっている。

ところが、繁栄を謳歌したキエフも、12世紀前葉、キエフ大公ウラジーミル・モノマフの死後、いよいよポーロヴェツ人と呼ばれるチュルク系騎馬民族の侵入を防ぎきれなくなり、東スラヴ人の政治的中心は北のウラジーミルに移ってしまう。取り残された南ロシアでは、ロシア諸公とポーロヴェツ諸公が複雑に絡み合う利害関係を切り結んで、終わりのない内乱が繰り返された。ロシア中世文学の白眉とされる『イーゴリ遠征物語』はこの泥沼のなかから咲き出た一輪の花であるが、『キエフ・ペチェルスキ修道院聖者列伝』のコアをなす物語群もそれより十数年あとはあるものの、混乱期の爛熟したキエフというほぼ同じ社会状況のなかで産み落とされたものである。

ちなみに、曲がりなりにもかつての繁栄の面影を十分に残していたキエフは、1240年12月、モンゴルの襲来によって壊滅的な打撃を受け、長らく荒廃に任されたが、17世紀前半、ザポロージェ・コサックによって再興された。現在のウクライナ共和国の首都としてのキエフは実質的にこのときに形成されたものである。キエフ洞窟修道院の敷地内には、当時のスラヴ世界でクラクフのヤゲロ大学、プラハのカレル大学とならぶ高等教育機関であるキエフ神学校が併設されて西欧文化受け入れの窓口になった。ピョートル大帝の西欧化政策を支えたのも、フェオファン・プロコポーヴィチに代表されるキエフ神学校出身の知識人である。

## 2. 『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の成立と時代背景

ここまでで、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』は13世紀はじめの作品であると述べてきたが、この言い方はかならずしも正確ではない。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』という名において、現在までに200以上の写本が確認され、その写本間のテキストの異同を詳細に検討すると、10種類以上の編纂本の存在(すなわち、10回以上の意図的な編纂活動の痕跡)が推定されている[ , 233 ]。この作品の核となるウラジーミル主教シモンと修士ポリカルプによる物語群が書かれたのはたしかに13世紀前半であったが、作品集は開かれた性格をもち、さまざまなテキストが流入して一つの総合体をかたちづいている。編纂本の数10以上というのは、その総合体のタイプの多様性を示すものである。

とはいえ、1462年に成立したカッシアン第2編纂本を底本として20世紀初頭に文献学者D. アブラモヴィチが校訂したテキストが、現今、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の名のもとで正本と認められている。本論において『キエフ洞窟修道院聖者列伝』といった場合、このアブラモヴィチ校訂テキストを指すが、ここで、このテキストの底本となった第2カッシアン編纂本の成立も含め、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の伝承史について簡単に触れておくことにしよう。

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の編纂活動は、15世紀と17世紀に二回の波に洗われている。ことに重要なのは15世紀の編纂活動でアルセーニイ、フェオドーシイ、カッシアン第1、カッシアン第2など種々の編纂本が成立し、作品集の基本的な型が出来上がった。つまり、15世紀の編纂活動によって、キエフ洞窟修道院において伝承されていたさまざまなテキストが発見され、集成され、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』という作品集がはじめてその姿をあらわしたのである。15世紀の編纂活動をどう捉えるべきかという事柄に関しては後述する。

一方、17世紀のそれは、15世紀までの成果(おもに第2カッシアン編纂本)に依拠しつつ時代の要請にこたえたもので、1635年にポーランド語への翻訳、50年代にキエフ洞窟修道院長イオシフ・トリズナによる編纂本、1661年に活版印刷による刊本などが成立したが、内容的には15世紀のそれにくらべて根幹にかかわる変更はない。いずれの編纂活動も、同時代の社会的状況と密接に関わっている。

まず15世紀の編纂活動であるが、北ロシアにおける荒野修道院運動の進展とモスクワ大公国の急速な台頭と密接な係わりあいをもつ。

ウラジーミル聖公、ヤロスラフ賢公の繁栄期にキエフ・ルーシとして統一されていた領域は、モンゴルの侵寇以後、キエフを含む南西部とモスクワを含む北東部に

分裂することになった。非常におざっぱに捉えて地理的な要因から、南西部はいわゆるモンゴル・タタールのくびきから脱出するためにカトリック勢力との提携を模索したのに対し、北東部はアレクサンドル・ネフスキに代表されるようにモンゴル勢力と妥協を図りながらカトリックの勢力拡張に警戒的に備えるという基本的な方向性を備えていた。14世紀後半には、北東部からはモスクワ大公国が、南西部からはリトアニア大公国があらわれ、かつてのキエフ大公国領の統一をめぐる激しく競合するようになる。

一方、その当時のキエフに視線を転じると、そこは騎馬民族の来襲にさらされてほとんど人間が住めるような状態ではない。武装していない住民は、捕らえられて地中海やアラビア世界で奴隷として売り払われてしまうのである。ちなみに、この地域がふたたび東スラヴ人の活動領域となるのは、武装自営農民であるコサックが力を蓄える16世紀のことである。荒廃したキエフのなかでかろうじて修道院だけが温存されていたのは、モンゴルの寛容な宗教政策によるところが大きい。ルーシ正教会の首長である府主教は、1299年、危険なキエフを避けてキエフ府主教という名称のまま北東部のウラジーミルに、やがて1326年からはモスクワに移り、歴代のモスクワ大公と強力な協調関係を築きあげていた。

府主教は正確には「キエフならびに全ルーシの府主教」であったが、モスクワ大公の影響のもとでモスクワに居住するという変則的な事情が存在したのである。これは、急速な勢力拡張によって南西部ルーシの正教信徒を配下に置くリトアニア大公国にとって容認できかねることであった。正教信徒に対する撫民策を必要としたリトアニア大公国は、キエフに独自の府主教を立てたうえでコンスタンティノーブル総主教に南西部を独立した教区として認めさせ、モスクワに対抗したため、キエフの戦略的重要性は一気に高まった。

しかしながら、主教座をめぐるモスクワ大公国とリトアニア大公国の対立には、別の側面も存在する。14世紀後半のリトアニア大公国はいまだキリスト教への改宗をしておらず、ローマとコンスタンティノーブルを天秤にかけ、キエフ府主教座を政治的に利用していたにすぎなかったのに対して、モスクワ大公国のもとでは、荒野修道院創設運動が活発化し、正教の正統性の主張に実質を与えていたことである。

荒野修道院とは、ロシアの大森林を霊的覚醒に向けての修業の場とした修道士たちの共同体で、14世紀中ごろ以降、北東部ルーシ各地にさかんに建設され、大自然とキリスト教を一体化させる清新な宗教精神を育むと同時に、国土開拓の尖兵となった。荒野修道院は、15世紀初頭、いわゆる「第2次南スラヴの影響」という正教会の枠内での文芸復興運動の担い手となった。

さらに、15世紀に入ると、リトアニア大公国にかわって今度はビザンツ帝国がキエフ府主教のステータスを使ってモスクワを制御しようとする。コンスタンティノーブル総主教庁は、リトアニアとモスクワを和解させてイスラム勢力の進出に対抗させようとした。

リトアニアとコンスタンティノーブル総主教庁が、おのおのの利害にもとづいてモスクワと対抗するうえで、キエフの戦略的重要性は否が応にも高まったが、その一方で同時に、ルーシにおける正教的伝統の流れを再認識し、純粋にキエフ時代の遺産を取り戻そうとする動きも活性化したのである。

長らく荒廃するに任されたキエフの霊的権威を称揚する必要から、ふたたびキエフ洞窟修道院が注目され、モスクワ・ルーシのセルギエフ三位一体修道院に比肩される南西部ルーシの霊的中心としての意義が再確認された。「言葉の編み細工」と呼ばれるまでに装飾的な文体によって書かれたモスクワの聖者伝文学（たとえば、『ラドネジの聖セルギイ伝』）に対して、のちにプーシキンが「素朴さと着想の美」と讃えるキエフの聖者伝文学（たとえば、『聖フェオドーシイ伝』）が対置された。こうした時代の要請にこたえて、キエフ洞窟修道院の霊威を顕揚するためにその編纂が意図された作品集が『キエフ洞窟修道院聖者列伝』であった。

15世紀の編纂活動のうち、現存する最初のもは、1406年、キエフ洞窟修道院出身のトヴェーリ主教アルセーニイの提唱によって編纂されたアルセーニイ編纂本であるが、テキストの細部の分析からこれよりもさらに古い編纂本が存在したことが確実であると考えられている。祈禱用の抜粋であるフェオドーシイ編纂本は、このオリジナルな編纂本をもとに作られたと考えられている。さらにこのオリジナルな編纂本を母体として、キエフ洞窟修道院の合唱指揮者カッシアンの注文を受けて、1460年に第1カッシアン編纂本、そして、1462年に決定版というべき第2カッシアン編纂本が編まれ、現在の『キエフ洞窟修道院聖者列伝』が確立された。

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』に収められた個々のテキストは、11世紀から13世紀にかけてのさまざまな作者の手になるものであるが、特定の意志のもとで編纂された作品集となるのはまさに15世紀のことであり、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』は、別の側面からは、15世紀の「第2次南スラヴの影響」の所産とする見方も無視できない。というよりも、次のように考えるのが適切かもしれない。

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の核をなすシモンとポリカルプによる物語が執筆されたのは、1215年から1225年のあいだと考えられている。そして、すでに述べたとおり、わずか十数年後の1240年には、キエフはモンゴル勢力によって壊滅させられ、17世紀にいたる

まで復興されなかった。このことから考えて、シモンとポリカルプによる物語は、モンゴル来寇の混乱のなかで完全に忘れられてしまったと考えてよいだろう。

15世紀になって、モスクワに対抗する存在としてのキエフが浮上してきたときに、さまざまな政治的な思惑とは別に、正教の伝統を見直そうとする動きがおこった。この動きのなかで、再発見されたのがシモンとポリカルプによる物語であり、付随してキエフ洞窟修道院聖母昇天教会建立やその精神的支柱であったフェオドーシイをめぐる一連のテキストが、「聖者列伝」というかたちでひと括りにされた。それが『キエフ洞窟修道院聖者列伝』というジャンルを横断する作品集だったのである。

一方、17世紀の編纂活動はどうであろうか。

イワン雷帝時代末期のテロルとスムータによって崩壊したモスクワにかわって、17世紀にはいると、南ロシアにおいてコサックたちが蓄えてきたその潜在力を開花させた。コサックとは、15世紀末ころから隷属生活を嫌って南ロシアのステップ地帯に逃れ、独立的な自治行政組織を築いた武装自営農民のことで、キエフを含むドニエプル川流域は、ポーランドの支配下から逃亡した農民からなるザポロージェ・コサックたちの治下に入った。長らく荒れ果てていたキエフは再興され、1634年には文化的中心としてキエフ神学校(アカデミー)が創設された。

ザポロージェ・コサックは行政的にはポーランド王国の臣民として登録されるものも多かったが、その一方で、宗教的にはカトリック国であるポーランドへの反感が渦巻き、正教への護教意識が高かった。当時のポーランドではイエズス会士の活動が活発で、彼らはローマ教会の首位権を認めさせたうえで正教の典礼を許すいわゆる東西教会合同を推進しようとしていた。キエフ神学校は、正教のカトリック化に断固抵抗するため、逆にカトリックの精神的富を正教に導き入れることを目的とし、敵陣営であるイエズス会系コレギウムのカリキュラムに則り、正教研究の分野で高い学術的水準を保った。キエフ神学校で重視されたのは、カトリック・ヨーロッパの共通語であったラテン語とポーランド語であった。

こうした状況を反映して、キエフこそいちはやくキリスト教文化が開花した土地であることを示す目的で、15世紀にひととおりの編纂活動を終えていた『キエフ洞窟修道院聖者列伝』への関心がにわかに高まった。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』で取り上げられた修道士たちが1643年に列聖された(ロシアでは、1762年)だけではなく、その編纂活動が再び活況を呈するようになったのである。

1635年(キエフ神学校創設の翌年)にポーランド語への翻訳がおこなわれ、はじめての活版印刷本の『キエフ洞窟修道院聖者列伝』が出版された。50年代にキエ

フ洞窟修道院長イオシフ・トリズナの主導によってあらたな編纂活動がおこなわれたが、この編纂本には修道院をめぐる新たな年代記的記述が付け加えられている。その後、1661年にはキエフ神学校に併設された印刷所でキリル文字による活版印刷本が刊行された。

13世紀におけるテキストの成立、15世紀、17世紀における編纂活動、いずれもが、森林とステップ、カトリックと正教、コサックといった二つの異なる文化圏の端境にあるキエフの位置を反映していて興味深い。

### 3. 作品集の構成

「                     = パテリーク」という語は、ギリシア語の「父」に語源をもち、慣習的に「聖者列伝」と訳されている。「聖者列伝」と呼ばれるジャンルは、「キリスト教教会文学」の一つであるが、敬虔な修道士の全人格、全人生を描こうとする「聖者伝」とは異なり、修道士たちの人生のさまざまな断面を、その統一性をあまり顧慮せずに集成したもので、徳行において秀でた修道士や聖職者ばかりではなく、反面的な教育効果をねらって墮罪へと至った修道士たちをも語りの対象としている。

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』は38のさまざまな物語、説教からなるが、その内訳は次のとおりである。

- 第1話 父よ、祝福したまえ
- 第2話 アントーニイとフェオドーシイのもとへ、ツァリグラードから教会を建築する職人たちが到着したこと
- 第3話 洞窟教会がいつ建築されたのか
- 第4話 院長ニコンのもとへ、ツァリグラードから教会画家たちが到着したこと
- 第5話 イオアンとセルゲイについて 奇跡の聖母イコンのまえて、神の洞窟教会で並々ならぬ奇跡が起こったこと
- 第6話 聖なる祭壇と聖母の偉大なる教会の聖別についての物語
- 第7話 洞窟修道院の修道士ネストルによる物語 何故に洞窟修道院と呼ばれたか
- 第8話 フェオドーシイ伝
- 第9話 八月一四日 洞窟修道院修道士ネストルによる物語 神のごとき師父、われらが父、フェオドーシイ・ペチェルスキイの聖骸を移し替えたこと
- 第10話 神のごときわれらが師父、フェオドーシイ・ペチェルスキイの柩に金の蓋をかぶせたこと
- 第11話 神に救われたる町キエフにおられる至尊の師父、われらがフェオドーシイ、洞窟修道院

- 長への頌詞
- 第12話 洞窟修道院黎明期の至福なる修道士たちについて この人々が聖なる洞窟修道院、至純なる聖母の館に住まい、神の御心になつたよき行い、徹夜禱、予言の才に秀でていたこと
- 第13話 ノヴゴロド主教となつた至福なるニフォントについて 聖なる洞窟修道院において神のごとき透視の力によって聖なるフェオドーシイを見たこと
- 第14話 謙虚なるウラジーミル・スーズダリ主教シモンの、洞窟修道院修道士ポリカルプへの書簡
- 第15話 ウラジーミル・スーズダリ主教シモンの洞窟修道院の最初期の修道士たちの 何故にこの人々が洞窟修道院の師父、アントーニイとフェオドーシイに誠実と愛をもつたのか
- 第16話 至福なる断食僧エフストラチイについて
- 第17話 謙虚で忍耐づよい修道僧ニコンについて
- 第18話 聖なる殉教者ククシャと断食僧ピーメンについて
- 第19話 隠遁僧聖なるアフナーシイについて この人が一度死んで翌日にふたたび生き返り、その後12年生き延びたこと
- 第20話 チェルニーゴフの公、聖なるスヴァトーシャについて
- 第21話 修道僧エラズムについて 自らの財産を聖なるイコンのために使い尽し、おかげで救いを見出したこと
- 第22話 修道僧アレファについて 盗賊に盗まれた財産を施しにかえ、そのために救われたこと
- 第23話 互いに憎みあつた二人の兄弟、ティトとエヴァグライイについて
- 第24話 洞窟修道院長の修道僧ポリカルプによって書かれた洞窟修道院長アキンディンへの第二書簡 われわれの兄弟、洞窟修道院の聖なる至福の修道僧について
- 第25話 のちにノヴゴロド主教となつた隠遁僧ニキータについて
- 第26話 隠遁僧ラヴレンチイについて
- 第27話 褒賞を求めぬ医者、聖なる至福のアガピットについて
- 第28話 奇跡の僧、聖なるグリゴリーイについて
- 第29話 忍耐づよき隠遁僧イオアンについて
- 第30話 神のごときハンガリー人モイセイイについて
- 第31話 修道僧プロホルについて 祈りによって、ロボダといわれる草からパンを、灰から塩を作つたこと
- 第32話 神のごときマルコについて 死者がこの人の指図に従つたこと

- 第33話 聖なる神のごとき師父、フェオドルとワシーリイについて
- 第34話 聖餅焼き、神のごときスピリドンとイコン画家アリンピイについて
- 第35話 神のごとき、苦しみ多き師父、ピーメンと死の直前に修道士になりたがる者たちについて
- 第36話 神のごとき、洞窟修道院のある修道士イサーキイについて
- 第37話 敬神の念篤き公イジャスラフのラテンの教えについての問い
- 第38話 われらが師父、至尊のポリカルプの死と司祭ワシーリイについて

これらの物語は、次のグループに大別される。物語集の登場順にしたがって整理すると、次のようになる。

- A．ペチェルスキ修道院聖母就寝（ウスペンスキイ）教会建立物語群（第1話から第7話）
- B．『聖フェオドーシイ伝』（第8話）と聖フェオドーシイをめぐる物語・説教（第9話から第13話）
- C．シモンのポリカルプへの説諭（第14話）と物語群（第15話から第23話）
- D．ポリカルプの大修道院長アキンディンへの書簡（第24話）と物語群（第25話から第35話）

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』という文集の中心にあるのは、シモンとポリカルプという二人の修道士による往復書簡形態の物語群（CおよびD）であるが、そのほか『キエフ洞窟修道院聖者列伝』を構成するテキスト・グループとして、キエフ洞窟修道院の開基をめぐる物語群（A）、その精神的支柱であった聖フェオドーシイをめぐる一連のテキスト群（B）が挙げられる。第36話は、ロシア最初の瘋癲行者（ユロージヴィイ）イサーキイに関する聖者伝風の物語であるが、狂ったイサーキイを懸命に看病するフェオドーシイの姿が描かれており、第12話と同様のものとしてグループBに属するものと考えてよい。

第37話と第38話はA - Dいずれの物語群にも属さない。まずは第37話を見ることにしよう。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の編纂活動が活況を呈した15世紀は、モスクワ大公国が台頭してきた時代と重なる。モスクワへの対抗意識が南ロシアに芽生え、それが作品成立のひとつの契機になったことはすでに触れたとおりであるが、しかしながらその一方で、モスクワであるとキエフであるとを問わず、キリスト教正教文化圏全体で反カトリックの気運がみなぎっていた。

第37話はこうした時代状況を反映して本文集に収められたが、表題のとおりこの書簡が第3代洞窟修道院長

フェオドーシイのものであるか否かは、しばしば疑念がさしはさまれている。12世紀半ばに修道院長を務めたギリシア人テオドロスの作とする説も存在する。

また、第38話はキエフ洞窟修道院院長アキンディンの死に関するものであるが、ここで登場する1182年生まれのアキンディンは、明らかに1215年から1225年のあいだに物語を執筆した破戒僧のポリカルプとは異なる人物であり、時代がたつにつれて両者の混同が生じたことを示している。

第37話に代表されるように、個々の作品はかならずしもそのすべてにおいて作者が同定されるわけではない。シモンとポリカルプのほかにもその名前がわかっている作者は、第8話『フェオドーシイ伝』や『ボリスとグレープの殉教物語』の作者としても有名なネストルのみである。第7話、第9話が作中においてネストルの作であると明示されており、それを積極的に疑う根拠も存在しないが、しかしながら、それらの作者ネストルと有名な年代記作者のネストルが同一である保証もない。『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の作者とは、この程度の緩やかさのなかで同定されるものであることを忘れるべきではないだろう。

#### 4. 物語群を概観する

##### A. キエフ洞窟修道院開基物語群

第1話から第7話がこのグループにあたる。第1話、第2話、第4話、第5話、第6話では、キエフ洞窟修道院聖母就寝教会が神慮にもとづいて建築され、聖別され、キエフの人々の教会として受け入れられるまでの経緯が描かれている。第3話は、キエフ洞窟修道院に対する頌詞(賛美の説教)、第7話は、聖母就寝教会にかぎらずキエフ洞窟修道院全般に関する年代記的記述で、ネストルの筆になるものとされる。

第1話では、ヴァリャグの地で政争に敗れたヴァリャグ貴族が、キリスト磔刑像を飾っていた金の帯をもちだしてルーシの土地に逃れる話である。逃亡の途中、やがてキエフに建設されるはずの聖母教会の幻が空中に現れ、神の命によって持ち出した黄金の帯で教会の寸法を測る奇跡譚が語られる。第2話はこれを受けて、コンスタンティノーブルから教会建築師たちがキエフに来着する話である。教会建築師たちは、ヴラケルナイの聖母就寝教会で聖母の幻を見、その命によって教会建築のためにキエフに来た。アントーニイは彼らの話を聞いたのち、神が教会を立てる場所を示すように祈ると、教会建立の場所は3度の奇跡によって示された。この二つの話では、没年が1072年または73年であるアントーニイ、1074年のフェオドーシイが存命している。

第4話は、神慮によってイコン画家たちがコンスタン

ティノーブルからキエフに来着する話である。第1話、第2話と異なり、第4話のエピソードは、アントーニイとフェオドーシイがこの世を去った10年以上のちのこととされる。死んだはずのアントーニイとフェオドーシイの幻がイコン画家たちの前に現れて制作費をわたし、彼らは遠路はるばるコンスタンティノーブルからキエフを訪れたのだった。イコン画家たちは、教会を飾るイコンのほか、教会のモザイク壁画の制作にもあたり、キエフ洞窟修道院でその生涯を終えた。

到着した画家たちに対応する修道院長ニコンは、1077年から1088年にかけて修道院長職にあったことがわかっている。これら二つの事柄と照らし合わせて、教会のモザイク壁画の制作は、1085年から1088年ころにかけてであったと推測される。ちなみに、『原初年代記』にはこの教会に関する記事は存在しない。

第5話は、彼らコンスタンティノーブルのイコン画家たちが制作したイコン画が、キエフの商人たちのもとで起こした奇跡が語られる。イコン画は、友人がその息子に譲るために託した遺産を奪おうとしたキエフの商人の悪巧みを暴く。一方、第6話の扱うエピソードは、1089年のこととされる。聖母就寝教会の石の祭壇が何者かの手で設えられ、何者かによって全ルーシの主教たちがキエフに呼び寄せられて、教会の聖別式が執りおこなわれる。

聖母就寝教会建立譚全体を貫くのは、アケイロポイエトスの思想である。アケイロポイエトスとは、「(人の)手によって作られたのではない」という意味のギリシア語で、それは という語としてスラヴ語に入っているが、基本的に聖画像を偶像崇拜から峻別してそれを正当化する思想である。この思想においては、イコン、すなわち、聖画像は人間の手によって描かれたり、作られたりしたものではなく、キリストが顔をぬぐったタオルにその顔かたちが刻印されたというエデッサの聖骸布のように、真のキリストの写し絵であり、天上世界への窓だとされる。この思想を体現するイコン画家アリンピイの話は、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』第34話に収められている。

##### B. フェオドーシイに関する一連のテキスト

第8話から第13話がこのグループにあたる。

第8話は『キエフ洞窟修道院聖者列伝』に収録された作品というよりも、『フェオドーシイ伝』という独立した作品として扱われる場合のほうが多い。作者は『原初年代記』の編者の一人とされているネストルで、『フェオドーシイ伝』は、『ボリスとグレープ生涯と殺害についての講話』《

》

を書き上げたのちの作である。

第9話「…洞窟修道院修道士ネストルによる物語…フェオドーシイ・ペチェルスキイの聖骸を移し替えたこと」は、『原初年代記』1091年の記事とほぼ内容が一致する。また、Aサイクルに属する第7話「何故に洞窟修道院と呼ばれたか」も同様にネストルの作とされているが、それは『原初年代記』1051年の記事とほぼ一致している。このことはネストルが『原初年代記』の作者とする説の根拠となっているが、その文体の複合性を考えると、『原初年代記』をネストル一人の作とは考えがたい。

第10話はフェオドーシイの死後の奇跡を扱っているが、フェオドーシイの徳を讃えることそのものよりも、世俗社会の修道生活への無理解を批判する内容の物語で、フェオドーシイの柩の装飾のための金を託された一人の貴族が主人公となっている。第13話では、正教会の秩序を遵守したゆえにコンスタンティノーブル総主教から賞賛されたというノヴゴロド主教ニフォントのエピソードが紹介されている。いずれの話でも、主人公たちの夢枕にフェオドーシイが立ち、助言をしたり、死後の救済を約束する。

第11話はフェオドーシイに対する賛美の説教であり、相当の分量がある。また、第12話はキエフ洞窟修道院の黎明期、フェオドーシイとともに修道生活を送ったデミアン、イエレーマイ、マトヴェイらの修道士たちについてのエピソードである。この第12話とイサーキイについての第36話とを併せた内容は、『原初年代記』1074年の項、フェオドーシイ・ペチェルスキイの死を報じる記事のなかで多少の文言の異同とともに繰り返されている。

#### C-D. シモンとポリカルブによる物語群

『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の核に当たる物語群で、シモンのポリカルブへの書簡が第14話、シモンによる物語が第15話から第23話、シモンからの書簡を受けてポリカルブがキエフ洞窟修道院長にしたための書簡が第24話、ポリカルブによる物語が第25話から第35話にあたる。基本的に、シモンによる物語は簡素で短く、ポリカルブによる物語は躍動感があり、長い。

物語成立に関するエピソードは、第14話と第24話から読み取ることができるが、それを総合すると次のようになる。

シモンはキエフ洞窟（ペチェルスキイ）修道院で修道したのち、1214年からウラジーミルとスーズダリの主教となり、1226年に世を去った。一方、ポリカルブはシモンとかかわりの深いキエフ洞窟修道院の修道士であったが、そこでの生活に不満を覚え、院長や修道士仲間と折り合いが悪く、ある政治的なつてを頼って主教となる野望をいだいた。

ポリカルブの心中を知ったシモンは、ポリカルブに宛てその世俗の野心を戒める書簡をしたため、洞窟修道院こそ俗世における霊的世界の中心であることを説き、書簡の付録として自らの筆になる八篇の修道士たちの物語を添えた。シモンのポリカルブへの難詰はつぎのような激しい調子ではじまっている。

「兄弟よ！黙って腰を落ち着け、小賢しい思いを捨て去り、わが身に問うがよい。『心貧しき修道僧よ、お前がこの世と生みの親を捨てきたのは主の御ためではなかったか？』と。もしも救いのために来たこの場所で魂のことをなさないならば、何故に僧としての名を名乗ったのか？そして今や、僧衣をまとう苦しみからお前は逃れることはできないのだ。」

ポリカルブはシモンの説得に応じて、深く反省して同僚たちと和解し、シモンの聖僧伝の続編となるべき10編の修道士たちの物語を書き、これらの物語は修道院長アキンジン宛の書簡に付されて提出された。以下にこの書簡の抜粋を記そう。

「神のご加護により、言葉はさだまり、あなた様のめでたきお知恵のためにお話申し上げます、全ルーシのいと尊き修道院長、師父にして主人なるアキンディン様。どうか、私のためにあなた様の貴きお耳をお貸しください。…どうか、あなた様の深き知恵が私の未熟な知恵といたらぬ心とをお汲み取りくださいますように、切にお願い申し上げます。」

以上のような成立事情を反映して、ふたりの修道士による物語は、中世ロシア文学の二重性を象徴するかのごとく、シモンが稚拙とも見える寡黙な語り口で静謐なキリスト教修道精神を湛えるのに対し、ポリカルブは聖書や聖典の学識や修道精神の静謐さよりも語りの面白さで際だっている。

しかしながら、その一方で、ポリカルブの物語の文学的魅力は筋立ての面白さばかりにあるのではなく、現世的な地位や名誉や利得を追求した破戒僧の懺悔の証として、冷酷な現実を乗り越えようとする魂の成長の記録として、シモンの物語とは別の深い宗教性をも獲得している。それは現実を苦さを舐めつくしたのちのある種のカタリススとも呼ぶべきものであろうか。ポリカルブによる物語の読み物としての面白さを整理すると、次のようになる。

1. フォークロア的な筋の構造を吸収している。
2. 筋の展開がドラマティックである。
3. 登場人物の科白まわしが激情的である。
4. 心理描写（ことに墮罪に至る）が巧みである。
5. キエフ・ルーシのレアリアを吸収し、理想化されない冷酷な現実世界を映しだしている。

ポリカルプによる物語は、上述のように、中世ロシアの教会文学には例外的に、その宗教性から独立して、純粹に文学としても面白い作品となっている。A. プーシキンが『キエフ洞窟修道院聖者列伝』を「素朴さと着想の美」と評したのも驚くべきことではない。

## 翻訳 ( )

教会の建立についてのペチェルスキイ修道院聖者列伝。この物語は、全ルーシの地の筆頭修道院にして聖なる偉大なる師父フェオドーシイの修道院であるペチェルスキイ修道院聖母教会が、主ご自身のご叡慮とご意志と、いと清らなる聖母の御祈りとお望みによって創建され、建立されたことを、万人が理解するように書かれたものである。

### 第1話 父よ、祝福したまえ

ヴァリャーグの地に盲目のヤクンの兄弟でアフリカンという名の公がいた。ヤクンについては、ヤロスラフに加勢して勇猛なムスチスラフと戦ったとき、黄金のベルトを無くしたことが知られている<sup>\*5</sup>。このアフリカンに二人の息子がいた。フリアンドとシュモンである。二人の兄弟の父アフリカンが死ぬと、ヤクンは二人をその領地から放逐した。シュモンは敬神の念篤きわれらが公ヤロスラフのもとに身を寄せ、丁寧に扱われた。ヤロスラフは彼を息子のフセヴォロドに与え、その守り役とした。

敬神の念篤き偉大なるイジャスラフがキエフ大公位にあったとき、6576年(1068年)、ポーロヴェツ人がルーシの地に攻め寄せた<sup>\*6</sup>。ヤロスラフの三人の息子、イジャスラフ、スヴァトスラフ、フセヴォロドが彼らを迎え撃つために出陣したが、そのとき、このシュモンを従軍させた。

この三人は偉大なる聖なるアントーニイのもとに祈りと祝福を求めて来訪したが、この老僧はうそ偽りのないその口を開いて彼らに破滅が近づいていることをはっきりと物語った。このヴァリャーグ人は老僧の足元に倒れ伏し、そのような災厄から自分を守ってくださいと懇願した。祝福された者はこの者に言った。「おお、子よ。何と多くの者が剣の先にかかって死ぬことか。おまえたちは敵から逃げようとするが、踏みつけにされたり、傷つけられたり、水に溺れたりするだろう。だが、おまえだけは救われてここに創建される教会に葬られることになるだろう。」

アルタ河畔に兵を進めたとき、両軍は会戦し、神の怒りによってキリスト教徒たちは打ち負かされ、兵士ばかりか将たちも逃亡の途中で敵に追いつかれてしまった。会戦したまさにそのとき、シュモンは傷を受けて敵味方

のなかに倒れた。上空を見上げると、シュモンはかつて海上で見たのと同じような巨大な教会を見、主の言葉を思い出して言った。「主よ、いと清らなるあなたの母様といと神に似たる師父アントーニイとフェオドーシイの御祈りによって、わたくしをこの惨い死からお救いください。」

すると、たちまち何かの力が彼を死者たちのなかから引き上げると、あっという間に傷が治り、自分の五体が無傷で壮健であるのを見出した。帰陣して祝福されたアントーニイのもとにゆくと、彼にこの奇跡的な事件のことを語ってこのように言った。

「わが父アフリカンは十字架をこしらえ、その十字架に色を塗った描画で神の人であるキリストの似姿をほどこしておりました。それは、ラテン人(カトリック教徒)たちが崇めているような今風のもので非常に巨大で10口カチ(長さの単位、肘から手の先までの長さ、およそ50センチメートル)もありました。父はこの十字架を敬い、その腰のまわりには50グリヴナにもおよぶ金のベルトを、その頭には金の冠をしつらえました。一族の年長者であるヤクンがわが所領より私を追放したとき、私はこのイエス像からベルトを、その頭から冠を取りはずしてもってゆこうとしたのですが、そのとき、像から声が聞こえました。その声は私に向かって次のようなことを言いました。『人間よ、どんなことがあってもその冠を自らの頭に被せてはならない。至聖なるフェオドーシイによってわが母のための教会が建立される、その場所までも運び、わが祭壇のうえに懸けられるよう、それをフェオドーシイの手にゆだねるがよい。』私は恐怖のあまり卒倒し、まるで死人のように身動きもままならぬまま倒れ伏しておりましたが、やがて船に乗り込みました。

私たちが船で航行していると大きな嵐が巻き起こりました。私たち全員がこれを限りにこの世ともお別れかと望みを失い、叫びはじめました。『主よ、私のことをお許しください。このベルトのおかげで私は今日死を賜ろうとしています。なぜなら、私はあなたの栄えある人型の像からこのベルトをはずして持ってきてしまったのですから。』

するとそのとき、空の高みに教会が浮かんでいるのを見たのです。わたしは、これは何の教会だろうかと考えました。空の高みから私たちのもとに声が聞こえてきました。その声がいうには、『至聖なるフェオドーシイによってわが母のために建立されるであろう教会がこれである。汝はこの教会に葬られることになるであろう。』

私たちに見えているあいだに金の帯で大きさと高さを測りましたところ、幅は20口カチ<sup>\*7</sup>、奥行きは30口カチ、高さは30口カチ、ドームを入れたてっぺんまでの高さは50口カチでした。私たちは神を称え、酷い死を

まめがれた大いなる喜びに慰められておりました。ところが、あなたの尊い唇から私がそこに葬られるであろうというお言葉を聞いた今になっても、海とアルタ河畔で死に瀕しているとき私に示されたその教会がどこに建立されるのかを、私は知らないのです。」

そして、金のベルトを取り出すと、アントーニイにわたして言った。「これこそがものの秤であり、礎です。この冠は聖なる祭壇のうえにかけられるべきものです。」

長老アントーニイはこのことについて神を称え、ヴァリヤグ人シュモンに言った。

「これからは、そなたはシュモンと呼ばれるのではなく、シモンがそなたの名前となるであろう。アントーニイは祝福されたフェオドーシイを呼び寄せて言った。「シモンよ、この者こそ、かくのごとき教会を建立する者ぞ。」

すると、シモンはかの人にベルトと冠をわたした。そして、このとき以来、聖なるフェオドーシイに対して大いなる愛を抱き、修道院建設のためにたくさんの財産を寄進した。

あるとき、この祝福された者のところにやってきていつものように話をしているときに、このシモンが聖なる人に言った。「父よ、私はひとつあなたからいただきたいものがあります。」フェオドーシイは彼に言った。「子よ、あなたのような富み栄えている方が、私のごときつましく生きる貧しい者に何を望むというのでしょうか？」シモンは言った。「私があなたに求めるのは、もっと大きな贈り物、私の力を超えた贈り物です。」フェオドーシイは言った。「子よ、ご理解ください。私たちの貧しさは、しばしば日々のパンさえ事欠くほど。私がおもてする微々たるもののほか、私は何も知りません。」シモンは言った。「もしもあなた様が望むなら、私にください。あなた様は、あなた様を至尊と名づけられた神からの恩寵によってそれをおできになります。私がいエス様の頭から冠を取り外しましたとき、神は私にこう仰せだったのでございます。『しかるべき場所にそれを運び、私の母のための教会を建立することになる至尊の者の手にそれをわたすように』と。このゆえに私はあなた様をお願いしているのです。この世に生きているときも、あなた様や私が死んだのちも、あなたの魂が私を祝福することを、どうかお約束ください。」すると、聖なるものは答えた。「シモンよ、それは力を超えた願いというものだ。しかしながら、私がこの世から去り、私の世界のあとその教会が建立され、受け継がれてきた修道規則がそのなかで守られているのを貴殿が見ることになったなら、それはとりもなおさず私が神の御前でとりなしをする勇気をもつことができたということだ。私の祈りが受け入れられるか否か、それは今の私にはわからない。」

シモンは言った。「あなた様は、神からお墨付きを得

ているのです。聖像のいと清らなるその唇から、私自身があなたのことを聞き知ったのですから。このゆえに私はあなた様に、あなた様が修道士たちのためにお祈りをささげるのと同じように、罪深き私とわが息子ゲオルギイ、そして、わが子々孫々のために祈りをお捧げくださるようお願い奉るのです。」聖なる人は約束したかのごとく言った。「私はこれらの者たちばかりではなく、私のゆえにこの聖なる場所を愛する者たちのために祈ることにしよう。」そのとき、シモンは地に身を投げ出して跪拝して言った。「父よ、もしもその祈りを書付にしてくださいらないならば、私はあなた様のもとから離れません。」至尊の人はシモンの愛ゆえに無理強いをされて、祈りを次のように声に出しながら書き留めた。「父と子と聖霊の御名において - 」今にいたるまで、死んだ者の手にこのような祈りをもたせる慣わしであるが、死者の手にこのような書付を握らせる慣わしは、このときに生まれたのであり、ルーシではそれ以前にはそのようなことをする者はいなかった\*<sup>8</sup>。祈りには次のように書かれていた。「主よ、あなたがこの王国に入り、その行いによってそれぞれの者たちにむくいを与えようとなさるときに、私のことを思い起こしてください\*<sup>9</sup>。そのときには、主よ、自らの僕シモンとゲオルギイを、あなた様の右手にあなた様の栄光に包まれて立ち、『お前たちは、わが父の祝福を受けにきた。この世のはじめからお前たちに約束されてきた王国を受け継ぐがよい\*<sup>10</sup>』というあなた様のお声を聞くのにふさわしい者としてください。」すると、シモンは言った。「父よ、私の両親と私の近親者たちの罪が許されるように、これらのことに加えておっしゃってください。フェオドーシイは自らの手を上げて言った。「シオンの丘から主がお前を祝福なさいますように。お前たちはお前たちが生きつづけるかぎり、そして、お前たちの子々孫々にいたるまで、エルサレムの幸を見ることになるだろう\*<sup>11</sup>。」

シモンはこの聖者から、まるで何か貴重な真珠が贈り物を受けたかのように、祈りと祝福を受けた。このものはかつてヴァリヤグ人であったが、キリストの恵みによってキリスト教徒となり、聖なるわれらが師父フェオドーシイによって教え導かれ、聖なるアントーニイとフェオドーシイによって起こった奇跡のゆえに、5千人にもおよぶ一族郎党、さらに自ら連れてきた司祭たちとともに、ラテン(カトリック)のでたらめな教えを捨てて、真にわれらが主イエス・キリストを信仰するようになった。そして、このシモンが最初にこの教会に葬られたものとなった。それ以来、その息子であるゲオルギイ\*<sup>12</sup>はこの聖なる場所に大きな愛をもつようになった。このゲオルギイはウラジーミル・モノマフ\*<sup>13</sup>によってスーズダリの地に移封されたが、そのさい、モノマフ公は自らの息子ゲオルギイをその手に委ねたのであった。多く

の年月がたってから、ゲオルギイ・ウラジーミロヴィチがキエフ公位を占めたとき、配下の千人長ゲオルギイにスーズダリの所領を拝領させたのである。

第2話 ツァリグラードから教会建築の宮大工たちがアントーニイとフェオドーシイのもとに到着したことに ついて

さて、汝ら兄弟よ、これから神によって選ばれた聖母<sup>\*14</sup> 教会にまつわる驚くべき妙なる奇跡について物語ろう。

ツァリグラードから顔る裕福な四人の教会大工たちが洞窟の偉大なるアントーニイ、フェオドーシイのもとにやって来て、「あなた方お二人は、どこに教会をお建てになるおつもりですか？」と言った。二人はこの人たちに向かって言った。「主のお命じになるところへ。」この人たちは言った。「ご自分の死を予見なさっておられるのに、教会を建てる場所をもお決めにもならず私たちに黄金をお渡しになったのですか。」アントーニイとフェオドーシイはすべての兄弟たちを呼び集め、ギリシア人に求めていった。「何が起こったのか、お話し下さい。」

この大工たちは言った。「わたしたちが家で寝ていると、朝早く太陽が昇るころ、私どもそれぞれのところへ妙なる姿の去勢者が訪れ、おっしゃいました。『天におわす聖母様がおまえたちをヴラケルナイ教会<sup>\*15</sup> に呼んでおられる。』私たちが供と縁者を連れていって、私たちが同じ時間同じ場所に集まったことを知ったのです。いろいろと話し合ってみますと、私たちがお告げを受けて呼び出されたのだとわかりました。私どもはそのとき、聖母様と聖母様を取り巻くたくさんの戦士たちを見、聖母様に向かって跪拝いたしました。聖母様が私たちにおっしゃるには、『私はキエフの地に自らの住まう教会を建てたいのです。おまえたちに命じます。三年分の黄金を受け取るように。』私どもは跪拝して言いました。『おお、主人なる聖母様、あなた様は私どもを異国へと差し向けなさる。私たちがその国で誰のもとに赴けばよいのでしょうか？』その方はおっしゃいました。『おまえたちをアントーニイとフェオドーシイのもとに遣いさせているのです。』私どもは申し上げました。『なぜあなた様は私たちに三年分の黄金をお与えになったのですか？そのお二方に私どものこと、私どもの口を糊するのに必要なすべてのものについてお命じ下さい。何によって私どもにお報い下さるか、あなた様をご存知でいらっしゃいます。』聖母様はおっしゃいました。『このアントーニイは祝福をあたえた後まもなくこの世を後にし、フェオドーシイもそののち二年後、主の御許に赴くこととなります。必要な黄金をお取りなさい。私以外、おまえたちにふさわしいだけ褒賞を与えることのできるものはおりません。私は人が今まで聞いたこともなく、また、その胸に浮かんだこともないほどのものをあたえます。私

は教会をこの目で見、そこに住みたいのです。』そして、聖殉教者アルテミイ、ポリエクト、レオンチイ、アカーキイ、アレーバ、ヤコフ、フェオドールの聖遺物を私たちにお手渡しになっておっしゃいました。『これらを礎石に置くように。』私たちは必要以上の黄金を受け取りました。聖母様は私たちにおっしゃいました。『外に出て、その大きさを測るがよい。』私たちは宙に教会を見、外に出ると跪拝を行い、尋ねました。『おお、ご主人様、この教会は何という名前なのですか。』聖母は名前をご自身に因んで名づけたい旨おっしゃいました。私どもはそのお名前を敢えて聞くことができませんでした。そのお方はおっしゃいました。『教会は聖母教会と呼ばれるであろう。』それから、私たちにこのイコンをお渡しになりました。そして、おっしゃるには『これは主座イコン<sup>\*16</sup> となるでしょう。』私たちは跪拝し、聖母の御手ずから授かったイコン携えてめいめいの家へ戻りました。そのとき、みなは神と、神を生んだ聖母を称えました。」

アントーニイは答えた。「子よ、私たちは一度としてこの場所を離れたことはありません。」ギリシア人たちは誓って言った。「あなた方の手から、多くの証人の前で黄金を受け取ったばかりでなく、その人々とともにあなたがたを舟まで見送り、あなた方の出発ののち一ヶ月後私どもは旅に出たのです。ツァリグラードを発って10日目です。聖母様に教会の大きさを伺うと、『それを測るために、息子の命で帯を送りました』とおっしゃったのです。」アントーニイは答えた。『おお、子よ。キリストはあなたがたに自らの意志の遂行者としての資格をお授けになったのです。あの姿のよい去勢者たち、至聖なる天使たちがあなたがたを呼びあつめ、ヴラケルナイにおいては、至聖の、清らかにして無垢なる天の主人、われらが聖母にして永遠の処女マリアが、護りの肉声なき天使たちを引き具して、あなたがたの眼前に目に見える姿となってたち現れたのです。私どもの姿と、あなた方に与えられた黄金については、自らがなし、自らの僕に対してお許しになったものだ、神ご自身がご存知です。あなた方の到着は祝福を受けており、福々しい同伴者、この栄えあるイコンをお持ち下さいました。聖母様はお約束とおあり、あなたがたに人が聞いたことも、その胸のうちに浮かんだこともないほどのものをお授けになりました。それをあたえることがお出来るのは、その御方と神と、われらが救い主イエス・キリストのほかにはございません。その帯と冠がヴァリヤグのもとからもたらされ、栄えある教会の広さ、奥行き、高さ、おのおのの寸法が告げられました。空から、偉大なる栄光によってこれを知らせる声があったのです。』ギリシア人たちは狂懼の念をもって聖者を拝し、言った。「その場所はどこなのですか。私たちに検分させてください。」

アントーニイは言った。「私たちは三日間祈り続けます。そのとき、神が私たちにお示しになりましょう。」

ギリシア人たちは畏怖の念に打たれて聖なる人々の前にひれ伏していった「その場所はどこですか？見せてください。」アントーニイは言った。「私たちは三日間祈ります。主が私たちにその場所を示してくれるでしょう。」その夜、彼が祈っていると、主が彼のもとにあらわれていった。「そなたは我が臨在の恩寵を見出した。」アントーニイは言った。「主よ、もし私があなたの臨在の栄に浴しておりますなら、地上一面を露でぬらしてください。ですが、あなたが聖別したいとお望みになっている場所を乾かしてください。」朝、彼らは現在教会の立っている場所が乾いており、その他の地面は一面露でぬれているのを見た。次の夜、彼は祈った。「全部の地面を乾かし、聖なる場所だけ露にぬらしてください。」彼らは外に出てみると、そうなっているのを見出した。三日目、まさにその場所に立って祈り、祝福し、金の帯で長さとおびさを測った。彼は両の腕を天に差し伸べ、アントーニイは大きな声で言った。「私の申し上げることをお聞き下さい。主よ。炎で私の願いをかなえてください。皆があなたがお望みだったとはっきりわかるように。」すると、炎が天からふり、林や灌木を焼きはらい、露を乾かし、溝のような低地部をうがった。聖なる人々とともにいた人々は恐怖のあまり倒れた。これが神の教会の始まりである。

### 第3話 いつペチェルスキイ教会が建立されたか

神慮めでたき聖母教会が建立されたのは、658(1073)年のことだった。

敬虔なる公スヴァトスラフ、すなわち、ヤロスラフ(賢公)の息子の治下で教会の建立が始まったが、そのときスヴァトスラフ公が自らの手で土台穴を掘ったのであった。キリストを愛するスヴァトスラフ公は、祝福された者を援助するために金100グリヴナを渡し、海で空から聞こえてきたあの声にしたがって金のベルトでその規矩を定めたのだった。聖なるアントーニイの聖者伝<sup>\*17</sup>のなかで、これらすべてがもっと詳しく読むことができるであろう。フェオドーシイの聖者伝のなかですべての者たちに顕かになっているのは、地から天へと炎の柱が現れ、あるときは雲のように、あるときはあの教会のてっぺんからこの場所にかかる虹のように姿を変えたこと、天使たちに携えられたイコンが何度も教会が建てられるはずの場所の通り過ぎるのが見えたことである。

兄弟たちよ、これより妙なることがあるだろうか。旧約聖書、新約聖書をくまなく読んでみても、聖なる教会に関するこれほどの奇跡はどこにも見出すことはできない。キリスト像の頭を飾った冠はヴァリヤグ人たちのもとから来たのであり、われらが主イエス・キリストご自身

の誉れ高き神慮めでたき人型の似姿に由来している。このキリストの似姿から私たちは神の響きをもつ天の声を聞いたのだった。その天の声は、キリストの似姿から冠をしかるべき場所に持ってゆくようにお命じなもので、万物の始原以前から聞こえているこの天の声にしたがって、あのベルトによって教会の規矩が測られたのだった。同じように、ギリシアの地から職人たちとともにイコンが到着し、聖なる殉教者たちの遺骸が壁際に葬られ、それら遺骸のうえの壁には殉教者ご自身の姿が描かれた。

かつて逝った者ら、敬神の念篤き公ら、キリストを愛する大貴族ら、誉れ高き修道士ら、すべての正教を奉ずるキリスト教徒らを褒め称えることが何よりも大切である。ここに葬られる資格を得た者は幸いであり、3倍も幸福であり、聖母とあらゆる生者たちの祈りによって主からの大いなる恩寵と慈愛を受けるにふさわしい。この過去帳にその名を記される資格を得たものは幸いであり、3倍も幸福である。なぜならば、これらの人々は罪の許しを得、天の報いを失うことがないからである。

聖書でも述べられているように、喜びなさい。大いに喜びなさい。天にあなた方の名前が書き込まれている<sup>\*18</sup>。なぜなら、神が天を愛するかのよう、この教会を愛したからである。神を生まれた方(聖母)が、「私はこの教会を見にゆき、その教会のなかに住まうことになるだろう」といって、ヴラケルナイで職人たちにお約束なされた。聖母がこの聖なる教会に住まれ、ここに葬られた者、この教会の過去帳に名前を記された者は、榮譽と賞賛を受けるのだ。これらの者たちは、つねに聖母の見守るなかでその記憶にとどめられるのである。

愛されたる者らよ、あなたたちの魂が堅固になるように、もう一つ説教をおこなうことにしよう。このような世界から脱落し、闇を愛し、神の使命を受けたこの教会を捨て、暴力と略奪によって人間が造った者を追いもめることほど悪いことがまたとあろうか。教会自らが教会をお造りになった方にむかって泣き叫んでいるのに。この教会をお建てになった方、創造主にして芸術家、造物主なる神が、自らの神性の炎で朽ちゆくもの、木々や丘を焼き払い、その母の家への道を切り開き、教会を建てる自らの僕らがそこにたどり着けるようになったのだ。

兄弟たちよ、その創建と始まりの話をよく知るがよい。父なる神は、高みから、露と炎の柱と輝く雲によって祝福をあたえたのだ。子なる神は、自らのベルトで規矩をあたえた。十字架の木は見かけは物にすぎぬかも知れないが、神の力を装わされているのだ。聖霊は物質ならざる炎によって、土台石を据える穴を穿ったのだ。主はこの石のうえに教会をお建てになった。地獄への門もこれに対抗することはできない<sup>\*19</sup>。聖母もまた然りである。

職人たちに3年分の給金を支払い、自らのいと誉れ高きイコンをお与えになり、ご自身の身代わりとなさったが、このイコンのおかげでたくさんの奇跡が起こったのである。

#### 第4話 教会絵師の修道院長ニコンのもとへの到着について

驚くべき奇跡がある、そのことを汝らに物語ろう。

神のご加護篤きコンスタンティノーブルの町から修道院長ニコンのもとにイコン画家たちが到着してこう言った。「私たちと契約を交わしたものと会わせてくれ。その二人組が私たちに迷惑なことをしてくれたのだ。彼らは私たちに小さな教会だといったので、多くの商人たちの前で契約を行ったのだ。なのに、教会はこんなに大きいではないか。あなたがたの黄金がある。おとりなさい。私たちはコンスタンティノーブルに帰ります。」修道院長は答えた。「契約を行ったのはどんな人たちでしたか？」イコン画家たちはその人々の姿かたちを説明し、アントーニイとフェオドーシイの名を告げた。修道院長は彼らに言った。「子よ、そのお二人に会わせることはできません。というのも、10年も前にその人たちはこの世を去ったのですから。そして、今は私たちのために絶えず祈り、この教会をゆるぎなく護り、自らの修道院を見守り、そこに暮らすものたちの身を案じておられるのです。」

ギリシア人たちはこれを聞き、この答えに恐れおのいてほかの多くの商人たち、コンスタンティノーブルから同道してきたギリシア人やアブハジア人<sup>\*20</sup>たちを連れてきた。彼らは言った。「これらの人々の前で、私たちは契約を結び、その二人から黄金を受け取ったのだ。それなのに、あなたは私たちの前に二人を連れてこない。もしも死んだというのなら、私たちにその二人の姿絵を見せてくれ。そうすれば、本人かどうか、みんながわかるだろう。」ギリシア人とアブハジア人たちは二人のイコンを見ると、跪拝してと言った。「真にこの方々であった。この方々が死後も生き、自らのもとへ来るものを助け、救い、そして、お護りになっていることを、私たちは信じます」と。彼らは売り物であるモザイクの材料を寄進して、それで聖なる祭壇が飾られた。

画家たちはみずからの罪について懺悔しはじめた。「舟に乗ってカネフ<sup>\*21</sup>に向かう途中、私たちは宙にこの教会が浮かんでいるのを見たのです。私たちは傍らにいる者たちに、これは何の教会だと尋ねてみますと、『ペチェルスキイ教会だ。お前たちはこの教会に絵を描くのだ』と答えました。私どもは腹を立て、下流に向かって逃げようといいたしました。その夜、川で大きな嵐がありました。翌朝起きてみると、私どもはトレポリ<sup>\*22</sup>のあたりにおりました。舟がひとりでに上流に流されて

いたのです。何かの力が引っ張っていったかのようございました。私どもは無理やり舟を押さえ、まる一日そこにとどまって、ほかの者たちが三日かかっても来ることのできない道のりを、漕ぎもしないのに来てしまったのはどういうことなのか、思案に暮れました。その夜、私たちは教会と妙なるイコンを見ました。そのイコンが私どもにおっしゃるには、『人間たちよ、なぜ、私の息子と私の意に背き、無益に足掻くのか。私に背き、ここから逃げ出そうとしても、私はお前たちみなを捕まえて船ごと私の教会のなかに連れてゆくでしょう。お前たちは知るがよい。私はお前たちをここから先へは行かせません。お前たちはこの修道院で剃髪し、生涯を終えることになりましょう。そして、私は、この教会を建てたアントーニイとフェオドーシイのために、来世でおまえたちを手篤くもてなすでしょう。』翌朝起きてみると、私どもは下流を目指して逃げようと骨を折って漕いだのですが、舟は逆に上流へと向かったのでございます。私どもは神のご意志とお力に屈して身をまかせ、じきに修道院の近くに流れ着いたのでございます。」

修道僧たちとギリシア人たち、ギリシア人の職人たちや絵師たち、すべての人々が偉大なる神と、いと清らかなる聖母の妙なるイコンと、聖なる師父アントーニイとフェオドーシイを称えた。職人たち、絵師たち、いずれもがペチェルスキイ修道院で修道士生活を送るなかで自らの生涯を終えた。彼らは自らの礼拝堂に葬られたが、彼らの衣服は宝物庫のなかにあり、彼らのギリシア語の書物はこの奇跡を記憶にとどめるために大切に保管されている。

聖歌隊長であった修道院長ステファン<sup>\*23</sup>は、修道院から追放されたときに、聖母のイコンを携えた職人たちが到着し、ヴラケルナイで聖母の顕現があったことを物語ったという、この光輝あふれる奇跡を見た。このゆえにステファンはクロフにヴラケルナイ教会を建立したのである。炎が天空から降って穴を穿ち、その穴にあのベルトで縄張りがおこなわれて教会の礎が置かれたわけであるが、敬神の念篤き公、ウラジーミル・フセヴォロドヴィチ・モノマフは若年のみぎり、その奇跡を自らの目で目撃したのであった。この奇跡は、ルーシの地全土で知られていた。このゆえに、フセヴォロド公は自らの息子ウラジーミルをともなってこの奇跡を見るべくペレヤスラヴリから到着したのであった。このときウラジーミルは病んでいたが、この金のベルトを体に巻きつけると、われらが聖なる師父アントーニイとフェオドーシイの祈りによって、たちまち健康になったのだった。

キリストを愛するこの公は、公位在位中に、神慮めでたきこのペチェルスキイ教会の寸法を測って、高さ、幅、奥行きにいたるまでそっくりそのままの規矩でロストフの町に教会を建立し、さらに羊皮紙には、それぞれの祝

日がそのおのおのの場所に記載されたのだったが、これらのことはすべてその秩序においても形においてもすべて、靈験あらたかなるこの偉大なる教会の範に倣っておこなわれた。息子のゲオルギイ公<sup>\*24</sup>は、この教会を建立した父君ウラジミール<sup>\*25</sup>からこの話を聞き知って、公位在位中にスーズダリの町にまったく同じ規矩で教会を建立したが、数年のちこれらの教会はみんな倒壊してしまって、この聖母教会だけがただひとつ幾久しく存在しているのである。

第5話 神慮めでたきペチェルスキイ教会の妙なる聖母イコンのまえで、イオアンとセルギイの身の上に驚くべき奇跡が起こったこと

この町の貴顕のなかにイオアンとセルギイという二人の男がいて、彼らは友人同士だった。この者たちは、神の命によって建立されたこの教会を訪れ、奇跡のイコンの太陽よりも眩い光を見て、信仰上の兄弟の契りを結んだ。

多くの年月がたってから、イオアンは病みつき、5歳になる自らの息子をこの世に残して他界した。そのとき、修道院長ニコン<sup>\*26</sup>を枕元に呼び、乞食たちに自らの財産を分かちあたえ、息子の取り分、銀1,000グリヴナと金100グリヴナをセルギイに預けた。自らの息子ザハリヤはまだ幼かったので、まるで血をわけた兄弟に託すかのごとく自らの友人の後見に委ね、このように遺言した。「わが息子が成人した暁には、この銀と金とを息子に渡してほしい。」

このザハリヤが15歳になったとき、セルギイのもとから父の金と銀とを受け取ろうと考えた。この者は悪魔に傷つけられて富を得ようと考え、魂とともに命を葬ろうとしてこの若者に言った。「お前の父親は財産をすべて神に捧げつくしたのだから、神に金と銀とをねだるがよかるう。お前が金を貸しているのは神なのだからな。もしも神がお前のことを憐れみたもうならば、だが。私はお前の父親にもお前にも1枚の金貨を支払う義務はない。お前の父親が自らの無思慮によってすべての自分の財産を喜捨としてばら撒き、お前を文無しの乞食にしてしまったのだ。」

このことを聞くと、若者は自らの取り分が失われてしまったことを思って泣きはじめた。若者は使いを送ってセルギイに懇願して言った。「私に半分を寄越して、もう半分をあなたが取りください。」

セルギイは残酷な言葉で彼の父親とザハリヤ自身を罵った。ザハリヤが求めるのが3分の1となり、やがて10分の1となった。ザハリヤはすべてが失われたことがわかると、セルギイに言った。「来てペチェルスキイ教会の奇跡の聖母イコンの前で私に誓いを立ててくれ。そこであなたは私の父と兄弟の契りを結んだのだから。」

この者は教会に入ると聖母イコンの前に立ち、宣誓し、銀1,000グリヴナと金100グリヴナを受け取っていないと言い、イコンに接吻しようとしたが、イコンに顔を近づけることができなかった。彼は扉から出ると泣きはじめた。

「おお、聖なるアントーニイとフェオドーシイよ。仮借なき天使に私を滅ぼすようにお命じなさいませ。聖母さまにおびたしい悪魔が私から退散するようにお祈りください。私は悪魔たちの手に委ねられているのです。私の部屋で封をしてしまわれている金と銀を受け取るがよい。」

それからというもの、聖母に対して誓いを立てることは許されなくなった。

人をやって封印された器を持ってくると、そこには2,000グリヴナの銀と200グリヴナの金とがあった。このようにして、神は喜捨をおこなったものの富を2倍にしたのである。ザハリヤはその望みどおりお使いくださいと、すべてを修道院長にわたした。

第6話 聖なる祭壇と大聖母教会の聖別について

ペチェルスキイ教会は6597(1089)年、イオアン修道院長<sup>\*27</sup>の1年目に聖別された。祭壇が置かれるべき場所に、テーブルにする石の板がなかった。石の祭壇が製作されるようにと、さかんに材料や職人探しがおこなわれたが、工事を請け負うべき職人は一人も見つからなかった。木のテーブルが用意されて置かれていた。府主教イオアネス<sup>\*28</sup>はこのような大きな教会に木製の祭壇はふさわしくないと考えていたので、このゆえに修道院長は大いなる悲しみのなかにいた。

8月13日の日、晩禱を歌う習慣のために修道士たちが教会のなかに入っていくと、祭壇の囲いのなかに、石の板と板をしつらえるべき石柱が置かれているのを見た。すぐに府主教にこのことが知らされた。府主教は神を称え、聖別と晩禱を執り行うように命じた。そのような石の板がどこから誰によってどのように教会のなかに入れたのか、いたるところ探されたが、教会は閉ざされていた。どこから運び込んだのか、水のなかも陸のうえもくまなく探されたが、運び込んだ者たちの痕跡は見出されなかった。職人がこの仕事のために報酬を受け取るように、こうした物が作られる工房に銀3グリヴナが送られた。問い合わせはあらゆる方面におよんだが、製作者はいなかった。

しかしながら、何といっても、これを行ったのは万物の創造主、考案者である神なのだ。神こそが、自らのいと清らなる御身体と御血を捧げるために、その輝かしい手で自らお作りになり、お置きになり、据え付けなされたのだ。自らがお作りになったこの聖なる祭壇の卓のうえで、全世界のために毎日捧げ物をおこなうことをお許

しになったのだ。

その翌日、府主教イオアンネスとともに、チェルニゴフ主教イオアン、ロストフ主教イサイヤ、ユーリエフ主教アントーニイ、ペロゴロド主教ルカが、誰も呼び集めもしないのに奉獻式に姿をあらわした。祝福された府主教は、これらの者たちに尋ねた。「何のために貴殿らは呼ばれもしないのに来たのか。」主教たちは答えた。「猯下、あなたから遣わされた者が私たちに、8月14日にペチェルスキイ教会の奉獻式が挙行される、皆は奉獻儀礼のさいに私とともに列席するように、とおっしゃったのです。私たちは、あえて猯下の仰せにそむく理由もございませんので、ここにおるわけでございます。」

ユーリエフ主教のアントーニイが答えた。「私は病に伏せておりましたが、その夜、一人の修道士が私のもとを訪ねてきて、私に『明日、ペチェルスキイ教会の奉獻式が挙行されるので列席するように』と言ったのです。私はこの言葉を聴くとたちまち元気になり、猯下のご命令どおりここにおるといふ次第です。」

府主教は、主教たちを呼び集めたそのような人間を探そうとしたとき、突然「神の御顔を求める人は」という声が聞こえてきた。府主教は両腕を天に差し伸べて言った。「いと清らなる聖母さま！自らの臨終に際し、埋葬のために使徒たちを世界の果てからお集めになったように、今、自らの教会の奉獻式のために、これらの代理の者ら、われらが僕をお集めになったのです！」

皆は偉大なる奇跡のために畏怖の念に打たれた。人々は教会の周りを3回回り、「公よ、汝の門を開けよ」と歌いはじめた。教会のなかには、それに答えて「この栄光に輝く王とは誰か」<sup>\*29</sup>を歌う者は誰もいないはずだった。なぜなら、主教の到着に皆が驚いていたので、教会のなかには誰一人として残されていなかったからである。長いあいだ沈黙がつづいたのち、天使のような声で「栄光に輝く王は誰か」というフレーズが聖堂のなかから聞こえてきた。それが誰で、そのような声が誰の声なのか、そのような声の持ち主が探索された。人々は聖堂のなかに入ってみたが、聖堂の扉が全部閉まっていた教会のなかには人っ子一人いなかった。すべてが神慮によるものであることを、みながはっきりわかった。「神の富と知識のなんと深いことか...いったい誰が主の心を知っていたであろうか。誰が主の相談相手であったらうか。」<sup>\*30</sup>

そして、主がお前たちを守り、いと清らなる聖母、至尊の福者われらが師父ペチェルスキイ修道院のアントーニイとフェオドーシイ、この修道院の聖なる修道士たちの祈りによって、お前たちの生涯のすべての日々を見守ってくださいますように。この人々とともに私たちがこの生においても、来世においても、われらが主イエスキリストを通して慈愛を受けることができますように。

今も永遠、永劫に聖霊とともにキリストに栄光を。アーメン。

第7話 ネストル、ペチェルスキイ修道院の修道士の物語、なぜペチェルスキイ修道院と呼ばれるようになったのか

神は、ルーシの地の専制君主、敬虔な偉大なる公ウラジーミル・スヴァトスラヴィチの治世に、ルーシの地を明るく照らし、修道生活を教え導く者が現れたことを、お喜びになったのであるが、私たちがこれから聞く話はこの人物にまつわることである。

リュベチの町出身である、ある男がいた。この男には、ごく若年のころから神に対する畏れが宿り、修道士の姿に身をやつすことを望んでいた。人間を愛される主はこの男に、ギリシアの国に赴き、そこで髪を剃り修道士になるという考えを吹きこまれた。この男はすぐに旅路へと踏みだし、諸国を遍歴し、われらの救済のために苦勞をいとわなかった主にならって諸国を巡ったのち、世界を支配する町コンスタンティノープルへ到着した。そののち、聖山アトスにいたり、アトスにある聖なる修道院の数々をめぐった。アトス山には修道院がたくさんあり、これらの師父たちが人間の本性より高い生活を送り、肉において天使のごとき生活を送っているのを見、いっそうキリストへの愛に身を焼き、これら師父たちの生活をまねびたいと願うようになった。

そこにある修道院の一つに着くと、修道士位階の天使の僧衣をまとわせてくださるように修道院長に懇願した。この男のなかに善き行いが芽吹いているのを見抜いた修道院長は、その願いを聞き入れ、アントーニイという名を与え、修道生活に関して教えを垂れ、導いた。アントーニイはあらゆる面で神の御心にかない、柔和さと謙虚さをもってほかの者たちに尽くしたので、皆はこの男に好意を抱いた。修道院長はこの男に言った。「アントーニイよ。ルーシに戻るがよい。その地で、ほかの者たちを導き、その者らの魂の支えとなるように。聖山の祝福がお前の身にあるように。」

アントーニイはキエフに到着すると、どこに居を定めようかと考えた。そして、あちらこちらの修道院に出かけてみたが、庵をむすぶ場として彼の気に入った修道院は一つとしてなかった。神がそうお望みにならなかったからである。彼は鬱蒼たる森や丘、あらゆる場所を徘徊しはじめたが、ベレストヴォにやってくるとヴァリヤーク人たちが掘った洞窟を見つけ、その洞窟に居を定め、そこで厳しい禁欲生活をはじめた。

その後、偉大なる公ウラジーミルが逝去すると、神を恐れぬ呪われたスヴァトポルク<sup>\*31</sup>が権力を握り、キエフ公位に就き、自らの兄弟の殺害を企図し、聖なるボリスとグレーブ<sup>\*32</sup>を殺した。このような流血の惨状を

目の当たりにしたアントーニイは、ふたたび聖山に逃げ帰ってしまった。信心深き公ヤロスラフがスヴァトポルクを打ち破ると、キエフ公位に就いたときのことだった。

神を愛する心が深いヤロスラフはベレストヴォと聖使徒教会を好み、多くの聖職者を庇護していた。この教会にイラリオンという名の司祭がいた。イラリオンは敬神の念篤く、神の御言葉に通暁し、齋戒を厳しく守っていた。このイラリオンはベレストヴォから、現在古い洞窟修道院がある、ドニエプル川沿いの丘に向かって歩き、そこにいたると祈りの業をおこなった。その当時そこには深い森があったが、イラリオンは2サージェンほどの小さな洞窟を掘った。イラリオンはベレストヴォからやってくると、詩篇を朗読したり、ひそかに神への祈りを捧げたものだった。

その後、神は、敬神の念篤き大公ヤロスラフの心に働きかけられたので、ヤロスラフは655(1051)年に主教たちを招集し、聖ソフィアでイラリオンを府主教に叙任し、イラリオンはこの洞窟を離れることになった。

アントーニイは、聖山の、彼が剃髪を受けた修道院にいたが、その修道院長に対して神から、「アントーニイをルーシに返してやりなさい。私にはこの男が必要だ」というお告げがあった。修道院長はアントーニイを呼び出していった。「アントーニイよ。ふたたびルーシに戻るがよい。神がそれをお望みになっているからだ。聖山から祝福があるように。なぜなら、多くの人間がそなたによって剃髪されるだろうから。」修道院長は祝福をあたえるとアントーニイをはなむけして言った。「平安に行くがよい。」

アントーニイはキエフに着くと、イラリオンが小さな洞窟を掘っていた丘に赴き、その場所がたいそう気に入り、そこに住みついた。そして、アントーニイは涙を流して神に祈りを捧げはじめた。「主よ、私をこの場所に定住させてください。この場所に聖山の祝福と、私を剃髪なさった師父の祈りとがありますように。」そして、神に祈りながらそこに住みはじめたのだった。彼は洞窟を掘った。その食べ物には干からびたパンで飲み物も水をほんの少し飲むだけ、昼も夜もゆっくり休む暇もなく、労働に従事し、睡眠をとらず、祈りに没頭した。しばらくたつと、人々は彼のことを知り、そのもとにやってくる必要なものを持ってくるようになった。彼は、エジプトのあのアントーニイ<sup>\*33</sup>のようにその名が知れわたるようになり、人々は彼のもとにやってくるはその祝福を求めた。

その後しばらくして、偉大なる公ヤロスラフが逝去し、その息子イジャスラフが権力を握り、キエフ公位に就いた。アントーニイの令名は、ルーシの地にあまねく知られていた。イジャスラフ公はその暮らしぶりを知り、彼の従士たちとともに彼のもとを訪れ、祝福と祈りを求め

た。偉大なるアントーニイのことはみな知っており、崇敬されていた。神を愛する、ある人々は剃髪してもらおうと彼のもとを訪れたが、アントーニイはその願いを聞き入れてやり、剃髪をおこなった。彼のもとに12人の兄弟たちが集まった。彼のもとにフェオドーシイもやってきて剃髪を受けた。大きな洞窟を掘り、その場所を教会と僧坊としたが、この洞窟は古い修道院の下に今日にいたるまで残っている。

あるとき兄弟たちが集まっていると、偉大なるアントーニイが言った。「兄弟たちよ、私たちをお集めになったのは、神である。お前たちは、聖山からの祝福を受けているのだ。同じ聖山からの祝福によって、聖山の修道院長が私を剃髪し、私がお前たちを剃髪した。お前たちには、まず第一に神と清らなる聖母から、そして第二に聖山から祝福があろう。」そして、アントーニイは彼らにこう言った。「これからは自分たちで生きていってほしい。私はお前たちのために修道院長を決め、私自身はあちらの山に入り、そこで一人で暮らすことにする。」

以前にも話したことがあるが、アントーニイは一人で暮らすことに慣れていたので。そして、修道士たちのためにヴァルラームという名の修道士を修道院長とすることに決め、一方、自分自身は山に入って、新しい修道院の下に洞窟を掘り、40年間洞窟から出ずに善行を積み、そこで自らの生を終えた。彼の敬虔なる遺骸はその洞窟にあって、今にいたるまで奇跡を起こしつづけている。

修道院長と兄弟たちは洞窟のなかに住んでいた。そして、兄弟たちが増え、洞窟に収容できなくなると、洞窟の外に修道院を建ててはどうかと考えはじめた。修道院長と兄弟たちは聖なるアントーニイのもとを訪れて彼に言った。「父よ！兄弟たちの数が増え、私たちは洞窟のなかで暮らしてゆくことができなくなりました。神と、いと清らなる聖母と、あなた様の祈りが、私たちが洞窟の外に教会を建てると、お命じになりますように。」至尊の人は、彼らにそう命じた。彼らは、アントーニイに地まで身をひれ伏すと退出した。そして、聖母就寝の名において洞窟のうえに教会を建立した。

そして、神は、いと清らなる聖母と至尊なるアントーニイの祈りによって、修道士たちの数を増し加えられ、兄弟たちは修道院長と修道院を創設しようと話し合った。そして、ふたたびアントーニイのもとを訪れて、彼に言った。「父よ！兄弟たちの数が増えました。私たちは修道院を創設したいと思っております。」アントーニイは喜んで言った。「神がすべてを嘉してくださいますように。聖母と聖山にいる修道士たちの祈りが、お前たちとともにありますように。」

こう言いおえると、兄弟たちの一人をイジャスラフ公のもとに送り、このように言った。「敬虔なる公よ、神は兄弟たちの数を増し加え、場所が手狭になりました。

私たちは殿下に洞窟の上の丘をくださるようお願いに参りました。」イジャスラフ公はこれを聞くと喜び、彼らのもとに大貴族の一人を送り、修道士たちにその丘を与えた。修道院長と兄弟たちはそこに大きな教会と修道院を定礎した。杭を打って周りを囲み、たくさんの僧坊を設け、教会を立ててイコンで飾った。そして、このゆえにペチェルスキイ修道院と呼ばれるようになった。なぜなら、修道士たちはかつて洞窟(ペチェラ)に住んでいたからである。そして、このゆえに聖山の祝福を受けたこの修道院は、ペチェルスキイ修道院と呼ばれたのである。

修道院が完成したとき修道院長を務めるのはヴァルラームであったが、イジャスラフ公は聖デメトリオスの修道院を建立し、このヴァルラームを引き抜き、聖デメトリオス修道院の院長に叙任した。イジャスラフ公は、自ら建立した修道院をペチェルスキイ修道院よりも格上にするために、富を恃んだのだ。たくさんの修道院が、王や大貴族の手でその富を費やして建てられたが、それらは、涙と齋戒と祈りと徹夜の勤めによって建てられたものとは異なる。アントーニイは金も銀も持っていなかったが、私が語ってきたとおり、涙と齋戒によって得るべきものを得たのである。

バルラームは聖デメトリオス修道院へと去ったが、兄弟たちに助言をあたえた。兄弟たちはアントーニイ長老のもとに赴いて彼に言った。「父よ、私たちのために修道院長を決めてください。」アントーニイは彼らに言った。「誰がいいと思うか。」兄弟たちは彼に言った。「神と、いと清らなる聖母と、敬神の念篤きあなた様が望む方を。」そして、偉大なるアントーニイは彼らに言った。「お前たちのなかで、従順で穏やかで柔和なこの至福のフェオドーシイほどの者があるか。この者こそ、お前たちの修道院長にするがよい。」兄弟たちは喜び、地にひれ伏してお辞儀をしてフェオドーシイを修道院長に据えた。

その当時、兄弟たちは20人ほどだった。フェオドーシイは修道院を受け継ぐと、厳しい禁欲の業、齋戒と涙の祈りに没頭しはじめた。すると、たくさんの修道士たちが集まりはじめ、兄弟たちは合わせて100人ほどにもなった。そして、フェオドーシイは、修道規則を探し始めたが、時を同じくして、ストディウス修道院の敬虔なる修道士ミカエルがいた。ミカエルは、府主教ゲオルギオスにとまなわれてギリシアからやってきたのだ。そして、フェオドーシイはストディウス修道院の修道士たちの修道規則について聞いてみると、果たしてこの修道士は知っていたので、それらをすべて書き留めた。そして、フェオドーシイは自らの修道院において、どのように修道院の祈禱歌を詠うか、お辞儀はどのようにすべきか、朗誦はどのようにすべきか、教会ではどのように立つべ

きかなど、教会でのあらゆる規則や、食堂でどこにどのように座るべきか、何をどの日に食べたらいかなど、あらゆることをはっきりと定めた。

フェオドーシイはこうした知識を得、自らの修道院に伝え、ルーシのすべての修道院はこの修道院から修道規則を受け入れた。このゆえに、ペチェルスキイ修道院はあらゆる修道院の中で首位の修道院として敬われ、その誉れはどの修道院より高いものと見なされた。

フェオドーシイはこの修道院のなかで生き、善行に満ちた生活と修道士としての規律を律しながら、この修道院に来るすべての者を受け入れた。私、浅ましく卑しき神の奴隷ネストルもここに至った。私が生まれてから17歳のとき、この修道院に受け入れられた。私が書き記したのは、何年に修道院が創立されたのか、どのような理由でペチェルスキイ修道院と呼ばれているのか、ということである。フェオドーシイの生涯については、またあとで語ることになるだろう。

#### 注

\* 1 . ポリヤーネ人は東スラヴ人の一派。ポリヤーネとは「平原の民」というほどの意。

\* 2 . キエフは「キーの(町)」の意。

\* 3 . ベレスヴェトヴォには、ヤロスラフ賢公が建てたとされる公の邸宅、修道院、救世主教会、聖使徒教会があったが、ヤロスラフがスヴァトボルクを破ってキエフ大公となるのは1019年のことであるから、1015年のボリスとグレーブ殺害事件以前、アントーニイがヴァリャーグの洞窟に籠もっていた時代には、これらの建築物はベレスヴェトヴォに存在しなかった。

\* 4 . のハリストス正教会における正訳は「生神女就寝」、カトリック教会における正訳は「聖母被昇天」である。しかしながら、「生神女就寝」は一般の日本人にとってややなじみにくく、「聖母被昇天」は神と聖母の位階的關係を正確に表していると思われるが、カトリック的色彩が強すぎて正教会用語の訳語としてなじまないと考えられるので、「聖母就寝」という訳を採用した。聖母就寝教会はしばしばウスペンスキイ聖堂、聖母教会などと呼ばれることがある。

\* 5 . ヤクンについては、『原初年代記』1024年の項([原初年代記, P.168])参照。ヤロスラフ(賢公)は、盲目のヤクンが率いてきたヴァリャーグ(ヴァイキング)の軍勢を率いて、トムトロカニ公ムスチスラフと戦ったが敗れ、敗走中にヤクンは黄金のマントを奪われた。

アフリカン、フリアンド、シュモンは、この箇所以外どの文献にも言及されていない。

\* 6 . ポーロヴェツ人たちの戦闘に関しては、『原初年代記』1068年の項([原初年代記, P.191])参照。この敗北の結果、キエフではポーロヴェツ人との徹底抗戦を叫ぶ住民が蜂起し、イジャスラフを追放した。イジャスラフはポーランドに逃亡したが、体勢を立て直して翌年キエフ大公に返り咲いた。しかしながら、以後、ここで名前を挙げられたヤロスラフの3人の息子たちが争い、キエフ大公位は安定しなかった。

ポーロヴェツ人とは、チュルク語系キプチャク族のロシア

語名。西ヨーロッパではクマン人とよばれた。10世紀ごろまで北西カザフスタンで遊牧生活を送っていたが、やがてボルガ川方面に移動し、11世紀には黒海北岸のステップ地帯、さらにはカフカス方面へと進出し、以来、ロシア、ハンガリー、ビザンツ帝国にたびたび侵入した。

\*7. 長さの単位。《ロカチ》とはもともと「肘」の意で、長さの単位としては、肘から中指の先までの長さ、およそ46センチメートルをあらわした。

\*8. ロシア正教会において、「許しの祈り」と呼ばれるものである。

\*9. 『ルカによる福音書』23章42節「イエスよ、あなたの御国においてになるときは、私を思い出してください。」

\*10. 『マタイによる福音書』25章34節「...さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちに用意されている国を受け継ぎなさい。...」

\*11. 『詩篇』128「...シオンから主があなたを祝福してくださるように。命ある限りエルサレムの繁栄を見、多くの子や孫を見るように。」

\*12. ウラジーミル・モノマフ公（次注参照）の子、ユーリイ手長公（ドルゴルーキイ、1090ころ-1157、在位1120ころ-1157）のこと。ユーリイはゲオルギイに同じ。モノマフ公によってロストフ・スーズダリの地（ルーシ北東部）に封ぜられたのち、未開のこの地の開発に努めた。その一方で、キエフ大公位への野心をも捨てず、相続争いに介入して1149年から1157年にかけて（1151年の短い中断を除いて）キエフ大公位をも手中に収めた。その子アンドレイ・ポゴリユプスキイ、フセヴォロド大巢公の時代に、ルーシの政治的中心はキエフからルーシ北東部のウラジーミルに移る。

\*13. ウラジーミル・モノマフ（1053-1125、在位1113-1125）は、ヤロスラフ賢公の子フセヴォロドとビザンツ皇帝コンスタンティノス9世モノマコスの娘イレネとのあいだに生まれたためモノマフというあだ名がつけられた。大公権の強化によってキエフの中興を達成したが一時的なもので、結局は地方分立の動きを阻止することはできなかった。

\*14. 東方正教会の正訳では「生神女」であるが、本稿では人口に膾炙した「聖母」を訳語として用いることにする。

\*15. コンスタンティノーブル湾近くの地名。奇跡の聖母イコンのある聖母教会がある。ヴラケルナイ教会とは、その聖母教会である。

\*16. 主座イコンとは、イコノスタス中央の王門の左右を飾るイコンのこと。

\*17. 『アントーニイ伝』は現存せず、本作品における言及からその作品の実在が推測されるのみである。

\*18. 『マタイによる福音書』5章12節「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

\*19. 『マタイによる福音書』16章18節「私はこの岩の上に教会を建てる。黄泉の力もこれに対抗することはできない」

\*20. カフカス西端の黒海沿岸に居住する民族の名。9世紀ころ、クタイシを首都とする王国を形成した。ソ連時代は、グルジア共和国の一部としてアプハジア自治共和国であったが、1999年に独立した。

\*21. カネフは、キエフ南方のドニエプル川畔の町。

\*22. ドニエプル川畔、キエフとカネフのあいだにある町。

\*23. ステファンはフェオドーシイのあとを襲って、1074年から1077年まで、キエフ洞窟修道院長職にあった。「聖歌

隊長」はギリシア語の  $\mu\zeta$  に由来する。なぜステファンが修道院から追放されたのかは定かではないが、M.プリショルコフは、ステファンがイジャスラフ公と不仲になったためと考えているが、この当時の世俗社会と修道院との関係をかんがみて十分に根拠がある。

\*24. ユーリイ・ドルゴルーキイのこと。

\*25. ウラジーミル・モノマフのこと。

\*26. ニコンは、ステファンを襲って1077年から1087年ないし88年にかけてキエフ洞窟修道院長職にあった。

\*27. イオアンは、ニコンのあとを襲って1088年から1108年にかけてキエフ洞窟修道院長職にあった。

\*28. イオアンネス（1世）は1077年から1089年にかけてキエフ府主教位にあった。『原初年代記』は、「聖書と学問に優れた人物であり、貧しい人や寡婦に対して慈悲深く、またすべての金持ちや貧しい人に対してはやさしく、また恭順であり、柔和で無口であったが、嘆くものを聖書によって慰めるときには雄弁であった。このような人はかつてルーシにはいなかったし、彼のあとにもこのような人はいないであろう」と讃えている。

\*29. 『詩篇』24、8節「栄光に輝く王とは誰か。強く雄雄しい主、雄雄しく戦われる主。」

\*30. 『ローマの信徒への手紙』11、33-34節「いったい誰が主の心を知っていたであろうか。誰が主の相談相手であったらうか。」

\*31. ウラジーミル聖公の子。ウラジーミル聖公の死後、跡目争いをめぐって弟のボリスとグレーブを殺害したが、同じく弟のヤロスラフ（賢公）に退けられた。

\*32. ウラジーミル聖公の子らで、兄スヴァトボルクに殺害され、ロシア史上初の聖者となった。

\*33. キリスト教修道制の父といわれる4世紀エジプトの隠修士。

## 参考文献

### 刊本

Das Paterikon des Kiever Hoelenklosters nach der Ausgabe von D. Abramovic neu herausgegeben von Dmitrij Tschizevskij. Muenchen, 1964

『...』, 1991

1980

『...』, 1999

### 翻訳

Heppell, M. The Paterik of the Kievan Caves Monastery. Harvard University, Cambridge, Massachusetts, 1989

Freydank, D., Sturm, G. Das Vaterbuch des Kiever Höhlenklosters. Graz-Wien-Koeln, Verlag Styria, 1989

中村喜和『ロシア中世物語集』、筑摩書房、1985

### 文学史

栗原成郎、川端香男里編『ロシア文学史』、東京大学出版会、1986年。

Cizevskij, D. History of Russian Literature from the Eleventh Century to the End of the Baroque. Mouton, 1962

Stender-Petersen, Ad. Anthology of Old Russian Literature.

New York, 1954

### 研究書

Bubner, F. Das Kiever Paterikon - Eine Untersuchung zu seiner Struktur und den literarischen Quellen, Werner Blasaditsch, 1969

Delehaye, H., Les Legendes Hagiographiques. Bruxelles, 1955

Goetz, L.K., Das Kiever Hoelenkloster als Kulturzentrum des vormongolischen Russlands. Passau, 1904

Pope, R. The Literary History of the " Kievan Caves Patericon " up to 1500. University Microfilms, A Xerox Company Ann Arbor, Michigan, 1970

Prestel, K.P. A Comparative Analysis of the " Kievan Caves Patericon ". University Microfilms International, 1985

, 1902

X-XII , 1913

, 1947

, 1915

, 1928

I i , , ε - i -

i i XVI - XVIII .

i i , 1990

, 1875

伊藤孝之、井内敏夫、中井和夫 『ポーランド・ウクライナ・バルト史』、山川出版社、1998

田中陽児、倉持俊一、和田春樹編 『ロシア史 1』、山川出版社、1994

三浦清美 『ロシアの源流』、講談社、2003

和田春樹編 『ロシア史』、山川出版社、2002